



第106代土木学会会長 小林 潔司

[聞き手] 鎌田敏郎 土木学会誌 編集委員長

業際・国際を俯瞰し より良い社会の構築へ

土木の世界に

「国際」の息吹を吹き込む

——ご就任おめでとうございます。

小林会長は京都大学経営管理大学院で講座を持っておられますね。

小林——京大にビジネススクールができて以来、大学院長を務めた時期も含めて12年間、ずっと院の経営に携わってきました。本籍はもちろん土木ですが、半分は経済や経営が専門ですね。

その前はずっと、土木の学生に公共経済学やリージョナルサイエンスを教えてきました。リージョナルサイエンスは地域科学、工学寄りの経済学です。土木の教員としては異色でしょうね(笑)。

私が経済分野へ目を向けるようになったのは、国際機関で世界の都市問題を研究するうちに、「国際社会では土木の知見だけでは意思決定の議

論ができない、経済を学ばなければ」と痛感したからです。

——学位は土木計画学や交通計画学の分野で取得されていますが、なぜ国際分野へ舵を切られたのですか？

小林——それは、留学したかったからです。長期出張でウィーンの国際応用システム分析研究所へ派遣されたのを皮切りに、OECDやWHO、世界銀行といった国際機関に貢献する機会を得ました。

——土木学会ではどのような活動をなさっていましたか？

小林——本格的に関わったのは、1996年に京大へ戻ってからですね。土木計画学研究委員会を育てていただきましたし、委員長も務めました。

思い出深いのは、2006年に土木学会論文集の編集委員長として、誌面改革にお手伝いできたことです。長年アソシエイトエディターを担っ

たASCE(アメリカ土木学会)のジャーナルを参考に、分冊をA1からHまでに細分化して専門性を高めたのです。同時に、英語の論文集も創刊しました。

2014年の土木学会100周年には、実行委員会の副委員長として国際フォーラムを主催し、モデレーターを務めました。世界各国の土木学会会長を招いて講演してもらったのです。

土木学会の国際化はまだ道半ばで、今後力を入れていく必要があると思っています。

先端技術を融合した

システムのシステム化こそ

これからの土木の役割

——今年が明治150年です。会長は、この間のインフラづくりを「前半はコア要素の整備期、後半はシステムの整備期」と分析されました。で



【日時】2018年6月7日(木)
土木学会役員会議室にて

はこの先、私たちはどのように考え、行動していくべきでしょうか。

小林——日本が終戦直後に描いたインフラの青写真は、大枠ではでき上がったと言っているでしょう。国づくりの次のビジョンをつくり上げる時期に来ています。

ところが、戦後の復興期とは違い、価値観やライフスタイルが多様化した今の時代に、単一の目標を掲げて国民的合意を得ることは不可能です。求められているのは、多様性を尊重し、各自がより良い生き方を達成できる社会でしょう。

誰もが思うように行動できる社会システムを実現するためには、インフラの高度化が必須であり、やらなければならぬことは、まだたくさんあります。

インフラというのは、コンクリートの塊ではなく精密機械だ——というのが、私の持論です。IoTやAIなど異分野の先端技術を取り入れ、ロボット化や自動運転などさまざまなシステムを連携させるシステムを開発していかねばなりません。すなわち「システムのシステム化」を進めるのが、私たちの使命です。

インパーシャリティー(えこひいきしないこと)を大原則とする行政は、国民の個別ニーズに対応しきれない。一方で、民間に任せておくと、サービス提供に偏りが生じる懸念があります。全体を俯瞰し、その間隙を埋め、社会をより良い方向へ導くことこそ、土木人の役割です。

土木工学の革新と 業際化・国際化を両立

——土木学会の進むべき方向や、会長としての抱負をお聞かせください。

小林——土木工学のイノベーションと、業際化・国際化の二つを両輪として進めていくことが重要です。

技術革新なくして、業際化や国際化はありません。技術のシーズの中からニーズに沿ったものを見つけ、その成果を再びシーズに還元する——そんなダイナミズムを生み出していきます。

土木学会は産官学の集まりですから、どんな技術が社会から求められているか、情報を得やすい環境にあります。これを積極的に吸収し、土木工学の発展に努めていきます。

業際化・国際化の一助としては、

国際ビジネスの現場で活躍する各界のリーダーとの対談を実施します。これは学会のホームページに掲載しますから、ぜひご覧ください。

もう一つは、大石前会長が注力されたレジリエンスの取組みを継承し、さらに国際的に展開していきます。具体的には、ASCEと組んでレジリエンス研究プロジェクトを立ち上げ、いずれは災害復旧の評価基準の確立につなげたい。日本の災害復旧の早さは奇跡的ですから、これが完成すれば、日本の素晴らしさを世界へアピールできるはずです。

——学会誌に期待することは。

小林——学会誌は、会員が相互につながることでできる貴重な交流の場です。いつでもどこでも読めるように、デジタル化するなど、さらなるサービス向上を目指してほしい。学会以外の人が興味を持ちそうな記事も多いので、外部への情報提供を検討してもいいと思います。

——本日はありがとうございました。

「執筆」三上美絵

「撮影」大村拓也